

PWE (Paddy and Water Environment) 誌の現状と展望 Status quo and perspectives of the PWE (Paddy and Water Environment) Journal

増本隆夫*
MASUMOTO Takao*

1. はじめに

これまで、一流英文誌の発刊、インパクトファクター(IF)の取得、モンスーンアジアの水田農業研究の世界への情報発信を目指し、PWE(Paddy and Water Environment)は農業農村工学会が支える国際誌として一定の評価と位置付けを得てきた。この結果は、財政の基盤となる購読会員や編集に携わった多くの研究者、PAWEESや本部学会の事務局の支援のお陰ともいえるが、一昨年にIF(Impact Factor)が1.0を切る結果となり、その改善を目指した一年となった。

ここでは、2016年7月に編集体制を新たにして2年間を経たことから、例年のようにPWEの現状とその変化を踏まえ、改善できた諸点と残された課題を取り上げて今後を展望してみたい。

2. PWE 掲載論文の現状

PWEは日本・韓国・台湾が中心になって2003年に発刊したこともあり、当初は3カ国からの投稿が中心であったが、受理論文をみると、3カ国の中で中心となっていた日本の論文に加え、次第に韓国や台湾の論文数が増大し、さらに近年は中国やインドを含めたアジア諸国全体に広がり、2017年には著者の所属が全世界115カ国に跨りまさに国際誌になってきた。一方で、欧州や北米からの論文数も一定の本数(20%程度)になり、論文のダウンロード数等は両地域が大きな割合を占めてきており(2016年訪問数で約23%)、PWEが目標としてきたモンスーンアジア水田農業の世界への情報発信の目標はある意味達成されてきている。全世界の国際誌からのPWE論文の引用数をみると第1著者がアジア以外のもので40%を越えていることから、同様な注目度になっているといえる。年間の論文ダウンロード数は、最近では5万件(2017年:7.2万回)を越えてきている。

2017年のPWEへの総投稿数は205本であり、多くの投稿数が維持されている中で、同年に査読結果がでた本数は187編、その中で、Acceptが49編(26%)、Rejectが138編(74%)と受理に至るには厳しい数字が維持されている。一方、2018年当初でみると、いずれも平均で初回投稿から、最初の判定に113日、Accept判定に253日、Reject判定に76日と、査読の期間の改善は若干ではあるが見えてきている(**Table 1**)。

Table 1 PWEへの投稿状況
Submission status of the papers in PWE

Submissions	2014	2015	2016	2017	2018 (-30 April)
Total Submitted	190	191	197	205	66
Total Decisined	147	159	201	187	81
Accept	58	44	55	49	24
Reject	89	115	146	138	57
Acceptance Rate	39%	28%	28%	26%	30%
Rejection Rate	61%	72%	72%	74%	70%
Average Days to First Decision	87	125	136	129	113
Average Days to Final Disposition Accept	205	309	301	226	253
Average Days to Final Disposition Reject	86	119	148	106	76

* 秋田県立大学 Akita Prefectural University
キーワード:PWE、インパクトファクター(IF)、編集体制、特集号

Table 2 PWE 論文の査読に取りかかる日数
Average time for inviting reviewers (days)

Activity	Days (Average)							
	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018 (-30 Apr)
Submission to Editor Assignment Average number of days between the date the manuscript was received and the first Editor was assigned	2.3	3.0	0.8	0.7	0.7	1.3	3.2	3.7
Submission to Reviewer Invitation Average number of days between the date the manuscripts was received and the first Reviewer was invited	22.8	49.6	22.7	46.5	69.1	28.4	30.2	15.2

と若干の増加(2016年:0.916)に転じた(Fig.1)。IFの数値では農学系では概ね中間位の位置にあり、当該誌は水田を主対象としたアジアからの投稿者や閲覧者(ダウンロード数では63%がアジア太平洋地域)が中心という状況から大健闘との評価があるものの、最低1.0を死守し、願わくは増加傾向を維持することが今後の目標となっている。

3. PWE 編集体制の変更と幾つかの課題解決の試み

最近の2年間でPWEの問題点を解決すべく幾つかの変更を行った。①編集体制の変更(2016年7月):当初、Editor-in-Chief(1)、Chief Managing Editor(1、補佐1)、Managing Editors(4)、Editors(18)の4段体制であったが、MEの役割が曖昧で(査読システムの設定問題も含む)、当時は3段での対応でCMEに過大な負担がかかっていた。まず、日本人の編集委員が全て交代するとともに、MEを各国1名ずつ増員(日本3、韓国2、台湾1の6名)、Editorの日本人増員(3から4)を行った。また、CME(2018年7月に台湾Lin教授から日本人に交代予定)へ集中していた、投稿論文担当のEditor選びや掲載決定までの論文トラック等を、複数のMEで分担することにした。さらに、編集委員会の開催による(日本人のみで学会大会時、EiCと3カ国代表CMEとの打合せ)、密な情報交換を行うことを目指した。その結果、Table 2にみられるように、投稿から査読者への依頼までの日数が短縮される結果となった。②特集号の企画:IFの向上のため特別号(過去に8号発行)の機会提供を行う(2018年16(2)にRice Ecosystem Services特集号が実現)。③印刷物のオンライン配信:従来の印刷数(500部)を60部に縮小し、論文掲載本数を増大させ、各号20論文(計約80論文)の印刷を恒常化した。④PWE論文情報の学会誌への掲載:14(4)号から掲載論文内容を「国際ジャーナルPWE内容紹介」として学会誌に記事化した。⑤組織対応とEditorial Advisorsの創設:農研機構、JIRCAS、寒地土研、IWMI等が組織として編集バックアップ体制の整備、編集体制中のEditing Board(当時29名)をEAと改称して、この役割の変更(世界各界の著名研究者を登録し、PWE誌の外部評判の向上とEditorsの相談相手)の試みを始めた。

一方で、PWEの査読編集システムには交代した旧編集委員のアドレスが長期間残されていたため、塩漬け査読論文や退任編集委員への采配依頼等が発生し、混乱を招く状況も生じた。加えて、一部のMEやEditorに割り当てが過度に集中している課題も発生している。

4. おわりに

現体制の日本人Managing EditorやEditorsには一期2年間で二期の役割分担をお願いしているが、諸氏の貢献でPWEの編集も活気がでてきたように感じている。一方で、上述の改善方策に加え、著名な研究者へのレビュー論文の投稿依頼、相互の引用促進等、地道な努力がIFの増加傾向の維持にさらに必要であるのかもしれない。

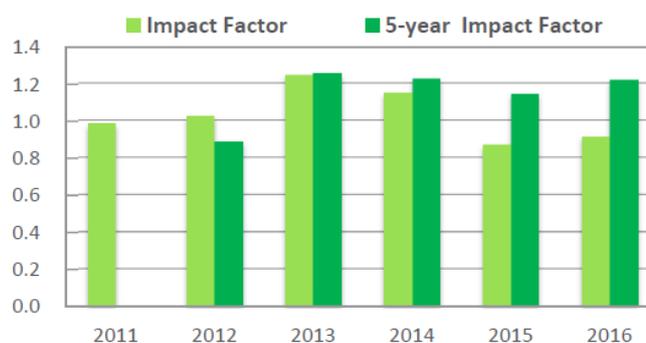


Fig.1 IFの推移
Change of IF of PWE